

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ



第9回 はじめの一步

ミャンマーに事務所を開いて、二度目の申告シーズンを迎えました。

ミャンマーでは、すべての会社と個人の会計年度が、4月から翌年3月です。ところ変われば税制も変わる、という訳で、ここミャンマーには不思議な制度がいくつもあります。その一つが、ミャンマーの申告納税制度。国中のすべての会社が3月決算、6月申告ですから、会計事務所の忙しさたるや、日本の確定申告の比ではありません。

しかし、実は本当の問題はそんなところにはありません。問題なのは、3月決算なのに、納税が3月末までということ。

え???
一体どうやって、納税するの???

普通の日本人なら、不思議に思いますよね。でも法律で決まっているのだから、文句を言っても仕方ありません。ミャンマーでは3月末までに、売上と経費を予測し、税額を予測して申告書を作成し、税金を納付しなければならぬのです。

でも、実際の決算額と予測が違っていたら、どうなるの?

はい、ごもっともな疑問です。ミャンマーは、外見上は申告納税制度を採用していますが、実際のところは、賦課課税制度です。6月に申告すると、その後半年から1年後ぐらいに、税務署から呼び出しがかかり、「これとこの経費は認められないから、去年の税金は〇〇チャットね」などと言われ、差額を払って、申告・納税が終わる仕組みなのです(これを、「タックス・ディマンディング」といいます)。

なーんだ。要するに3月に仮納税しておいて、後から精算すればいいのね。

いえいえ、残念ながら、そう単純には話が進みません。3月に払った税額が、最終的にタックス・ディマンディングで確定した金額に足りないと、その差額に過少申告加算税が10%も課税されてしまうからです。そうすると大抵の日本人は、次のように考えますよね。

だったら、3月に多めに払っておけばいいんじゃないの?

日本の常識は、世界の非常識。ミャンマーの常識は、世界

の非常識です。ミャンマーでは、多く払った税金が還付されることはありません。次の年の税金に繰り越されるだけなのです。というわけで、3月の仮納税では、出来るだけ実額に近い数字で、しかも少しだけ少な目に申告しなければなりません。

その上、3月末までに納税するのが、これまた物理的に大変なのです。なぜなら日本のように、自分で白紙の納付書に税額を書いて、銀行の窓口でちょいちょいと払う訳にはいかないからです。

ミャンマーではまず、税金を計算した申告書を税務署に提出し、税務職員が会社情報をコンピュータに入力します。その後、税務署から発行された納付書をもって、銀行の窓口でその納付書とお金を持参して、納税します。しかし、法人の申告納税を受付ける税務署の窓口は、ヤンゴンに1箇所だけ。しかも、電力事情の悪いヤンゴンでは、いまだに停電がしょっちゅうおきたり、サーバーのダウンが起きたりするのです。

実際のところ彼の国では、まともに税金を納めるなんて馬鹿げていると、3月に納税するローカルの会社は少ないのが現実です。しかし経済が解放され、日本以外にも、ミャンマーに進出する外資系企業数は、ここ2年で急激に増加。ローカル法人と違って、コンプライアンスにうるさい外資系企業は、当然ですが、法律通りに納税しようと考えます。

つまり今年、ミャンマーの税務署は、これまで経験したことのない申告納税ラッシュに襲われ、税務署もサーバーも大パニックに襲われてしまったのです。

月末、日本の税務署と同じように、ミャンマーの税務署も押しあい、へしあいの大混雑。わがミャンマー事務所でも、混雑を予測して早目に申告書を持ち込んだものの、今日はサーバーがダウンしたので、もうこれ以上申告書を受け付けられない、と申告書の受付拒否にあってしまったのです。

日本の税務署なら、いくら混んでいても、申告する人がいっぱい来て大変だから、申告期限前、もう受付終了ですとか、あり得ない話ですよ…。

いやいや、日本の常識はミャンマーの非常識。ミャンマーの常識は日本の非常識(←どくてスミマセン…)

というわけで、日本だったら…などと、文句を言ってる場合ではありません。山手線のラッシュアワー並みに混雑する中、ギュウギュウに押されながらも、他人を押し分け、押しのけ(汗)、もまれること8時間、少しずつ前に進んで、何

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、「51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)」「トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)」「世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)」「一生食っていくための土業の営業術(中経出版)」など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

とか納税までこぎつけることができたのでした。
恐るべし、ミャンマー…。

日本の常識にとらわれて行動することの甘さを、改めて思い知らされました。ミャンマーに来ると、本当に日本は恵まれているなーと、つくづく感じます。皆がルールを守り、整然と行動する。誰に言われなくても電車が来れば、ちゃんと列を作って待つし、アンダーテーブルを払って、ズルをする人もいません。日本の良さは、日本にいたら分からないと、つくづく思います。

でもだからと言って、ミャンマーに進出したことを後悔したことは、一度もありません。エネルギーの塊のような発展途上国の熱気を浴びて、いつもワクワクドキドキできるからです。一度しかない人生、これ以上の楽しみがあるでしょうか。

思えば、周り中の反対を押し切って、ミャンマーに事務所をオープンしてから、2年が経ちました。誰一人として知り合いもない、言葉も通じない、右も左もわからない、一人ではタクシーにも乗れない…。文字どおり、ゼロからのスタートでした。

一人ずつ、一人ずつ、名刺交換をして知り合いが増え、道路の名前を覚え、事務所を借り、スタッフを雇い、初めてのお客様を獲得し、気がつけば今ではミャンマー人スタッフが4名に増えました…。

まだまだ、総括するには早すぎるし、ミャンマー進出が成功したと大きな声で言えるほどではありませんが、2年前、ここまで出来るとは、正直思ってはいませんでした。

ただやみくもに、アジアに事務所を出したい、そう思っただけです。そして、ミャンマーに事務所を出したいなーと、声に出して呟いてみただけです。

すると魔法のように、ミャンマーに興味のある人たちと何人も知り合いました。気が付けば私の周りにミャンマー・ネットワークというものが出来上がり、そのネットワークからすでに進出している人を紹介され、ミャンマー人パートナーを紹介され、空いている部屋があるからと事務所を紹介され、いい人がいるからと従業員を紹介され、いつの間にか、後には引けなくなっていたのです。

世界中どこを探しても、最初から成功している人など一人もいません。誰にでも、アマゾンを興したジェフ・ベゾスにも、アップルのスティーブ・ジョブズにも、はじめの一步があったのです。私のはじめの一步は、ミャンマーに出たい、という心の中の「思い」でした。思いがなければ、何も始まらない。本当に今、つくづく思います。

今年のNHK大河ドラマは、吉田松陰の妹が主人公です。吉田松陰は、素晴らしい名言をいくつも残しているの、私の好きな言葉をご紹介しますおきましょう。

夢なき者に理想なし、
理想なき者に計画なし、
計画なき者に実行なし、
実行なき者に成功なし。
故に、
夢なき者に成功なし。

好評発売中

7人家族の主婦で1日3時間しか使えなかった私が知識ゼロから難関資格に合格した方法

原 尚美 著 (中経出版) 1,300円+税

アタマのいい人と勉強のできる人は違います。勉強のできる人は、点をとるコツを知っているだけなのです。どうすれば本番で実力以上の力を発揮して、難関試験に合格するための、超合理的な、大人の勉強法について書いたものです。がんばっているのだけれど、なぜか結果のでない方、勉強したいのに、仕事が忙しくて時間がとれないビジネスパーソン、今よりひとつ上の人生を目指しくて、悩んでいる方、このまま家庭の中だけに埋もれてしまいたくない子育て中のママ、そんな皆さんへの応援の気持ちを込めた一冊です。

7人家族の主婦で1日3時間しか使えなかった私が知識ゼロから難関資格に合格した方法

合格率10%以下の難関資格にストレートで合格した驚異的なメソッド、公開!

資格試験、語学検定、昇進試験……働きながら、どんな試験も必ず受かる!

税理士 原 尚美